



越智 信仁 著

『持続可能性とイノベーションの統合報告』

(日本評論社 308頁)
4,320円 (税込)

統合報告に対する関心が急速に高まっている。その採用企業は急速に拡大しつつあり、巷には多くのガイドラインや解説書があふれ始めている。とはいえ、会計・開示の世界では、こうした動きは一過性のブームで終わることも少なくない。

本書は、3つの視点から統合報告をめぐる潮流を整理し、それらが一過性の取り組みではなく、より安定した社会のもとで持続可能な経済発展を支える外部不経済の内部化や企業のイノベーションを促進させるための本質的な活動であることを、過去の制度的な変遷と膨大な先行研究に基づき示している。さらにそれらを実効性ある取り組みとするための課題を学際的な視点から示した画期的な研究書である。

第1の視点は、社会価値的側面から見た統合報告のダイナミクスである。欧州を起点として外部不経済性を企業に内部化させる取り組みとして、国際的な開示規範としての統合報告の変遷を示している。特にハードロー、ソフトローやそれを基礎としたコーポレート・ガバナンス、さらにはNPOやNGOなど関係するプレイヤーが織りなすダイナミクスが重要な役割を果たすことを示している。

第2の視点は、投資価値的側面から見た統合報告のダイナミクスである。財務情報の価値関連性の低下、短期志向 (short-termism) の進展に伴う持続可能性やイノベーション活動の低迷など金融市場で起こりつつある不都合な真実に対する投資家や関連機関の取り組みがその動きを加速させていることを本書は示している。

第3の視点は、統合報告書の信頼性や監査・保証業務の視点である。非財務情報の監査・保証業

序章 本書の問題意識と貢献

[第I部] 社会価値的側面からの統合ダイナミクス

第1章 CSR情報開示規範の役割とコーポレート・ガバナンス

第2章 CSR規範形成過程におけるNPOの機能

第3章 非政府組織関与による国際開示規範形成の促進

[第II部] 投資価値的側面からの統合ダイナミクス

第4章 統合報告の論理とIR・制度開示との関係性

第5章 イノベーションを描写する動的な統合報告

[第III部] 統合報告書の信頼性と監査・保証業務等

第6章 ESG情報の報告形態と監査・保証

第7章 任意開示された統合報告書への信頼性付与

[第III部補章] 経営者不正に備えた制度インフラ

補章1 不正リスク対応基準と監査人の職業的懐疑心

補章2 銀行監督と会計士業務の連携強化

終章 統括と今後の課題

務の歴史は短いものの、上記の2つの視点を実体化する上で不可欠な視点である。本書ではその現状を整理し、将来の課題を検討している。

本書の特徴は、単に世界における統合報告の史の変遷を整理するにとどまらず、日本企業に適合した統合報告を検討している点である。こうした特徴が顕著に現れるのは第4章と第5章である。第4章では、日本の財務報告制度を前提に統合的思考に基づく開示を実践するにあたっての制度的な課題を整理している。第5章では、日本企業の多くが、「負のインタンジブルズ」を抱えている点に着目し、その概念整理をした上で、それを克服する手段としての統合報告書の役割に言及している点は注目に値する。ややもすると皮相的に捉えられがちな統合報告の議論であるが、日本企業が直面する本質的な課題を克服する上で重要な役割を果たすという指摘は傾聴に値するだろう。

しかしながら、本書が指摘するとおり、統合報告を有効に機能させるためには、日本企業の「負のインタンジブルズ」の実態やその決定因子を明らかにする豊かな実証的な証拠や見えざる資産や負債を可視化するための学際研究の展開が求められる。さらにそれらの事実を基礎として、外部不経済の内部化や企業のイノベーションを進展させるための課題に対して、経営者や投資家、会計監査人や規制当局などの関係者の間で、相互に理解し、革新に向けて動くことが不可欠である。

統合報告書に関与する可能性があるすべての関係者に本書をお読みいただき、将来に向けて持続的な企業価値創造を支える、日本流の統合報告のあり方を展望いただくことを期待したい。

(一橋大学大学院商学研究所 加賀谷 哲之)